２０１４年８月号・季刊４６号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友

日本から家族でこられた
お父さんとお母さんと
大学生と高校生の二人の息子さん
お父さんは、さすがにお忙しくて
それでも、ＭＣＬがどうしても見たくて
来られて早めに帰られた。
お姉ちゃんは、オーストラリアに遊学中
写真の眼鏡をかけている
お兄ちゃんは、マニラの大学で勉強中。
タガログ語がペラペラで、
すっかり現地に溶け込んでいる！
お父さんいわく
「なにも、日本にこだわらなくても
これからの若者たちは、世界を見つめて
思うように、旅立っていけば、
いいんじゃないですか。」

お母さんと息子さん二人は
山のマノボ族の電気の無い村
キアタウ村に泊まられた。
スタッフと現地出身の奨学生たちも同行
現地の子どもたちは大喜びで
自分たちのお兄ちゃんとして
心から迎えてくれた。

「物が買えて、
美味しい料理が食べられるだけが
幸せではないと、思います。
本当の幸せについて、考えさせられました。
また来ます。ぜったいに！」

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL

幸せに安心して育つことが出来る場所

ミンダナオ子ども図書館を始めたとき、親がいなかったり、見捨てられたり。戦争で両親とも目の前で殺されて、孤児になったりした子達を見て、第一に感じたのは、様々な言い知れない悲しみを経験して来た子たちだけに、この子たちが安心して成長し、思春期を迎え、やがて思い思いに旅立っていけるような、そんな家庭のような場所を提供したい、ということだった。

それともう一つ、常に考えの基本になったのが、もしこの子たちが我が子だったら、どうしてやりたいか、という事だった。

孤児施設だと17歳で追い出されるけど、我が子だったら、大学まで行かせてやりたいと思うだろうし、たとえ頭脳優秀でなく、大学4年は無理であったとしても、せめて専門学校や技術学校に行かせてあげて、旅立ちの糧にしてあげたい。

たとえ予期せぬ恋愛と妊娠があって、学業が半ばで止まっても、笑顔で結婚式に参列して、幸せな家庭を作るように祝福してあげたい。

困ったときはいつでも帰っておいで、と一言残して。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップと里子支援

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピンの南の端、ミンダナオ島にある現地法人NGOです。

政治や特定の宗派の元では行動しない原則を持っています。むしろ、互いの宗派や種族の違いを、尊重し認め合って、そのうえで一つの家族として友情、愛情をもって生きることを現地で実践しています。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc. というのが、正式名称で、略してMCLと呼ばれています。

根幹をなす活動（プライマリーパーパス）は、「読み語りと文化活動」で、子どもや若者たちが活動の中心を担っています。

二次的活動（セカンダリーパーパス）として「医療」「スカラシップ里子」「子どものシェルター」「保育所建設」「植林支援」があり、状況に応じて「戦闘や洪水避難民救済・平和構築」を許可を得て活動しています。

現地でわたしが目の当たりにした、笑顔を失った、戦争避難民の子どもたちの、悲惨な状況から始めた活動であるだけに、子どもたちが笑顔を取り戻すこと（読み語り）、病気を治せること（医療）そして、未来に希望をもって踏み出せること（教育）が基盤で、その後現地活動を継続していく中で、保育所建設の必要性、そして洪水対策および収入プロジェクトとして植林プランが加わってきました。

この紙面では、その中のスカラシップ里子支援についてご説明します。

MCLのスカラシップは、他のスカラシップ支援とは、だいぶ違っている面が多いので、支援者の方々、特にこれから支援してくださる方々に、よく理解していただいていた方が良いと感じるからです。

ご存じのようにミンダナオは、多種族、多民族、多宗教であって、イスラム教徒と先住民族と島外移民が、混交して来た400年の歴史があります。

本来平和に暮らしてきたのですが、ここ40年にわたり、開発による貧富の格差が広がると同時に、国際的な農業資源や鉱山利権を目的とした大小の戦争が起こされて来ました。

以外と知られていないのですが、国連の調べによりますと、ミンダナオは戦争避難民の数が、累計で世界一。その大きな犠牲になっているのが、イスラム地域と先住民族の地域です。

ミンダナオ子ども図書館では、スカラシップ支援を通して、そうした地域の子どもたちが、小学校から大学まで

行けるようにしています。

現在、手元にある最新のデータによりますと、奨学生の総計は、５９７名です。小学生が、２０２名。高校生が、２７１名。大学生が、１２４名。

基本的に、一人の子に一人の支援者がつくのですが、現地で出会うと放っておくことが出来ない子が多く、心をえぐられて採用し、支援者がいないのに、自由寄付で学校に行かせてあげている子が、約２００人います。

ＭＣＬのスカラシップは、原則としてイスラム教徒、先住民族、移民系クリスチャンを3分の1づつ平等に採用し、宗教や種族、文化の違いをお互いに認め合いながら、友情の中で、貧困撲滅と平和構築を目的に始められています。

宗派別の最新のデータでは、イスラム教徒が１７３名、移民系クリスチャンが１３２名、先住民族が２９２名です。

結果的に、先住民族の割合が多いのは、先住民族の貧困状況が最も厳しく、小学校にいけないどころか、3食の米も食べられず、山岳部の自給地に生えるカサバイモと沢のカエルやカニを食べて、何とか食いつないでいる家族が多いからです。

先住民族の場合、宗教的には、プロテスタント系が多いのですが、村の牧師さんが酋長でもあり、独自の民族的な儀礼や儀式をつかさどったりしています。

ＭＣＬのスカラシップは、学校や教会に依頼して、成績優秀者を探すのではなく、松居友自らが、山岳地域の極貧の集落や、戦闘の絶えないイスラム反政府地域に赴き、そのなかでもとりわけ不幸な境遇に置かれている子を採用します。

貧困といっても、物質的に豊かな環境に生まれた日本の人々には、ちょっと想像が出来ないと思いますが、山岳地に追われた先住民の場合など、食事は三食たべられないどころか、いわゆるおかずらしいものはなく、自然に生えているイモやバナナをとってきて、ゆでて、塩をつけて食べるぐらいです。

塩すら買えない（現金がまったくない）家庭も多く、穴の開いた服を着て靴も草履もなく、裸足という状況が、まだいたるところに見られます。

作物を育てる畑や水田を作れる低地は、多少なりともお金のある、移民系のクリスチャンやイスラムの人々の所有となっています。

彼らの生活も、豊かであるとはいえないものの、本来住んでいた低地から、山岳地域のより深い山々や谷へと、半ば強制的に移住させられてきた先住民族の場合は、貧困の度合いが深刻です。

山岳地域では、自給するのがようやくで、とりわけ土地の無い家族の場合、現金収入があるはずもなく、父親や母親は、山の下の低地に住んでいる人々の、田んぼの畔の草刈りや、畑仕事や洗濯を手伝って、日銭を稼ぎ、それで塩や米を買い、家族のところにもちかえるのがようやくです。

一家族で子どもの平均が約７名ですから、義務教育制度があったとしても、全員小学校を卒業するのは不可能です。全員どころか、一人でも小学校卒業させられれば御の字です。

義務によって、小学校には名前を登録させられるのですが、名簿に名前は載っていても、2年生になると学業停止を余儀なくさせられる家族も多くいます。午後の授業が開始されて、お弁当を持ってこられない子が多いからです。なかには、2年生になると、生徒の６０％がストップし、卒業するのは数名といった村すらあります。

生徒のなかには、お弁当を食べている子たちをしり目に、外で、おなかがすいているのを忘れるために、大はしゃぎで遊んでいる子もいます。

しかし、次第に学年が上がるにしたがって、靴もなく、制服も買えず、鉛

テレビで放映された「なぜここに日本人」を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。
「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、映像サイトに入れます。

筆やノートの学用品も買えず、さらにこれは、私たちも文句を言いたいぐらいなのですが、クラス単位で何らかのプロジェクトが企画され、それに付随する模造紙などの購入の負担を求められ、それが出来ないと点数がもらえないといったことが、小、高の義務教育のなかでも行われており、これでは、極貧世帯では、小学校卒業も夢のまた夢というのがわかります。

しかし、両親がいる家庭の場合は、たとえ極貧でも、兄弟姉妹で助け合ったり、家族で助け合ったりします。

父母と兄たちが、早朝山に芝刈りに行くのを、子どもたちが見送り、長女は赤ちゃんをおぶって、下の子どもたちの面倒を見（当然学校はあきらめます）。下の子たちは、それぞれ川に洗濯をしにいったり、マキを集めたりして働いて、夕ご飯の用意をしながら父母の帰りを待ちます。

保護者に、子どもの中の一人を奨学生として推薦してもらう場合、3番目か4番目の女の子で、勉強好きな子を推薦してくるのは、上の女の子たちは家の手伝い、男の子は力仕事にかりだされるためです。

女の子の場合、13，4歳になると、親の取り決めで結婚させられたりするのも、伝統文化ではあるものの、口減らしではないかと思う時があります。

しかし、貧困ゆえに、集落の人々は互いに助け合います。家族だけではなく、村落共同体も生きていて、隣近所の人たちも、特に厳しい生活の家族の面倒を、当たり前のごとく見ていきます。

その意味では、現代の日本に失われてしまった隣人愛が、現地には生きていると言えるでしょう。ですから、どんなに状況が厳しくとも、生活苦を元に自殺するとか、一家心中するとか、あるいは、子どもやお年寄りだけが家に取り残されたあげく、死んでいたといったことは、特に山のコミュニティーではありえないことです。

ＭＣＬのスカラシップの採用の基準も、変わっていて、第一基準は、極貧の集落の中でも、特に親のない子、片親の子、崩壊家庭の子。

第二基準が、親はいても極貧で、生活に困窮している世帯の子です。

ＭＣＬのスカラシップは、学校教育を目的としてはいるのですが、他のスカラシップとの大きな違いがいくつかあります。その一つが、極貧のなかでも、特に親のいない子を優先していることです。

貧しくとも、子どもを育てる責任は、基本的に親にあります。ＭＣＬでは、極貧でも両親がそれなりに、肉体的にも精神的にもしっかりしている場合は、なるべく親の努力に任せます。

しかし、本当に大変なのが、父親が病気で亡くなったり、母親がいなくなったり、何らかの理由で家庭が崩壊した子どもたちです。

そうした状況でも、子どもたちは自殺をしたりすることなく、親戚や近所の誰彼かに引き取られて生きていくのですが、そうした家庭にもたくさんの子どもたちがいるわけですから、我が子優先になり、引きとった子まで、学校に行かせることはできません。

そうした子は、たいがい早朝に起きて家事手伝いをし、便所の掃除や洗濯、子守や雑用をさせられます。

ミンダナオ子ども図書館の奨学制度は、こうした貧困の中でも特に不遇な子たちを選んで、大学まで行かせてあげるスカラシップです。

確かに、家庭どころか、集落の中でさえも、小学校どころか高校卒業も夢のまた夢。そのような村で、大学卒業者が出て、将来地元の学校の先生になったりしていくと、村に希望が生まれてきて、村が明るくなってきます。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

すでにＭＣＬでは、たくさんの卒業生たちが、先生になったり福祉士になったり、看護師になったりして地元で活躍しています。

ただ、成績の良い子ばかりではないので、そのような子には、高校や小学校を卒業した時点で、専門学校にいかせたり、運転や裁縫の技術訓練コースに行かせてあげたりして、少しでも条件の良い形で社会に出られるようにしてあげています。

若くして結婚してしまう子も中にはいるのですが、幸せを祝福し、いざ困った時には、駆け込み寺のように相談したり、実家のつもりで戻っておいでと言っています。

海外に出た子も中にはいますが、少数派で、ＭＣＬでは子どもたちに、海外に出るよりもミンダナオを、特に地元の貧しい子たちのために働いてほしいと絶えず話しています。

孤児、片親、崩壊家庭の子たちの場合、現地の村に置いておきますと、勉強に集中できないばかりか、状況によっては、近所の人や継父にレイプされているケースもあり、その場合は、本人と保護者の希望を得て、ミンダナオ子ども図書館に、住まわせてあげています。

中には、福祉局や教会の孤児施設から、「この子をお願いします」、と言ってこられて、引き取った子たちもいます。そういう子たちは、ミンダナオ子ども図書館の本部に住み込んで、近くの小学校や高校に通うと同時に、食事も庭づくりも、野菜作りも彼らが見事にこなしています。

ＭＣＬには、ソーシャルワーカーもいて、子どものシェルターとしての許可も得ているのですが、「孤児施設」ではありません。実際には、孤児施設としての働きも兼ねていますが、ここに住んでいるのは様々な環境に置かれた子たちですが、孤児だけではありません。

それに、学校で自分たちを、孤児院に住んでいる孤児と感じるよりは、たとえ成績は良くなくとも、奨学生「スカラシップ学生」と呼ばれる方が、心理的にかなり違います。親のいない子だけを集めるのではなく、多様な子たちがのびのびと育ち、学校に行けるのが、ＭＣＬ本部の特徴です。

現在本部には、１００名ほどの子どもたちが住んでいます。

イスラム教徒、クリスチャン、先住民が、いっしょに生活しています。「そんなことは不可能だ！」という人もいますが、全然問題はありません。みな、兄弟姉妹で一つの家族だと、言い張っています。

食事も朝４時半に起きて、自分たちで作ります。私も妻も子どもたちも一緒に同じ食事をたべますが、まるで子どもたちに養ってもらっているような気分です。問題があれば、話し合いで解決します。豚は食べません。

福祉局の指導により、本部は基本的に女子寮になっています。小学校までは、男子もＯＫ。しかし、高校になると、どうしても恋愛などの問題が起こるので、別にするようにという事です。

また、女子も大学生になると、本部を出て下宿します。将来の就職をひかえてアルバイトをしたりもできますし、独自の責任において、子どもではないので恋愛も可能ですが、妊娠させたり、したりした場合はストップです。

ミンダナオ子ども図書館は、キダパ

メール：mcl.v.staff@gmail.com（現地日本人スタッフ）

電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話フィリピン使用・松居友）
mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）

ワン市に大学生の寮を持っています。大学があるのは、都市部なので、僻地で高校まで卒業できた子たちも、大学は町に出なければなりません。

そのために、大学生には、生活費になるお小遣いに加えて、下宿代を支援しています。しかし、極貧で親もいない子の場合は、食べるのも不可能なので、一軒の家をレンタルしたり下宿小屋を独自に作っています。そこに滞在する子の場合は、米とおかずを支給しています。

本部で小学校を卒業した男の子たちは、その後本部を離れ、町の大学生の下宿小屋に移り、そこから近くの高校に通います。下宿施設には、スタッフがハウスペアレントとして常住しています。

それとはさらに別に、ミンダナオ子ども図書館は、山に男子寮と女子寮を持っています。かなり山の奥ですが、高校と小学校が近くにあります。

自分の村からは遠くで学校まで通えない子や、両親が極端に貧しく、食事が提供できないような家庭の子たちが、高校まで通えるようにしています。ここにもスタッフが常駐し、子どもたちに食事を提供しています。

すべてを合わせると、約２００人ぐらいの（食べ盛りの）子たちに食事を提供しているのですが、一日１００キロの米が消費されます。

現在水田を購入して、必死に自給率を高めているところです。

一人の、真に恵まれない子を大学まで行かせるのは、並大抵の事ではないなと思うのですが、子どもたちを見ると健気で、もしもこの子が我が子だったらどうしてあげたいか、といつも考えてしまうのです。

ＭＣＬのスカラシップの特徴は、貧困の中でも不遇な子たちが、大学まで行けると同時に、とりわけ不幸な環境に置かれて、ＭＣＬに住んでいる子たちが、読み語りや難民救済、植林などのボランティア活動を行い、その過程で、学校教育では学べない地域の現実を学び、精神的に自立再生していくことが出来ることです。

ミンダナオ子ども図書館の基幹をなすのは、読み語り。活動の中心は、子どもたちや若者たちです。

読み語りをする場所は、山奥の先住民の極貧集落だったり（徒歩や馬で行くときもある）、イスラムの反政府地域で、一般の人々やＮＧＯでも入れない湿原地帯だったりします。僻村のなかでも僻村、極貧のなかでも極貧、危険な中でも最も危険な戦闘地域。

「なぜ、日本人がたった一人で、そのような地域に入れるのか」と、よく聞かれるのですが、最初は、興味はあっても絶対に入れないと思っていました。

しかし、ただひたすら貧しい子どもたちのことを想い、戦争や極貧からくる家庭崩壊で、劣悪な生活環境のなかに、本人の意志に反して置かれてしまっている子どもたちのために、時には戦渦をかいくぐって活動していると、それがたとえ、有名な反政府や戦闘地域の村々であったとしても、人々が心を開いて受け入れてくれるのがわかってきました。

しかし、そのような活動を、日本人が一人で出来るわけはなく、活動の中心を担ってきたのは、子どもたちや若者たちだったのです。

読み聞かせや医療活動を、現地で行ってきたのも、若者たちですし、ＭＣＬを立ち上げるために、行政機関に赴いて、現地法人の資格を取ったのも彼らでした・・・。

現地で読み語りをすると、集まってくる子どもたちの中に、「これはひど

い、何とかしてあげたいなあ」という子どもたちが出てきます。

戦闘で避難民化していたり、極貧で現金収入がほとんどなく、病気になっても薬も買えず、学校にも行けず、日々の食事や服にも困っている子どもたち。そのような子たちを目の前にすると、どうしても放っておけない。

それがスカラシップや医療、古着や植林プロジェクトを始めたきっかけでした。

ミンダナオで大学に行けるのは、おそらく20パーセントにも満たない金持ちだけでしょう。

大学を出たからといって、特別な事だとは思わないのですが、こんな不平等を見ていると、極貧で小学校を卒業するだけでも夢のまた夢である彼らにこそ大学に行ってもらいたい、そして、少しでも社会を変えてほしい、と思ったのです。

それが、スカラシッププロジェクトを始めた理由のひとつです。

スカラシップ支援は、大学からはじまり高校へと下がっていきました。しかし、極貧の村を訪ねるにつけて、貧困世帯の子どもたちは、小学校すら卒業出来ない状況を見るにいたり、「これは、小学生の支援から始めなければ、スカラシップも意味がない」と感じ、小学校の子どもたちに教材やプロジェクト代、ときには炊き出し用の米をとどける里子支援を開始したのです。

そうした結果、現在、奨学生の数は、小学校から高校大学まで597名あまり。増やそうと思ったことは毛頭ないのですが、現地で子どもたちに出会うとどうしても放っておけない性格が災いして?この人数になってしまいました。

しかも、まだ支援者が見つかっていないのに、見かねて採用するものですから、支援者がいないにもかかわらず、自由寄付で学校に行かせてあげている子が、200人もいるのです。

それでも、がんばって無理をしてでも奨学生を採ってきたもう一つの理由は、スカラシップが和平構築に有益だからです。

国際停戦監視団でもなかなか入れない、MILF（モロ・イスラム解放戦線）などの戦争地域、特に舟でしか行けないリグアサン湿原や、NPA（共産ゲリラ）の跋扈するアポ山周辺の山岳地域では、40年間にわたって戦闘が絶えません。

こうした極貧の村々をめぐりつつ、スカラシップや里子支援を通して、地域と信頼関係を持つことによって、戦渦のときに安全に子どもたちの救済活動に走ったりすることができるばかりではなく、その後の平和構築のためにも、非常に有益だということが体験からわかってきたからです。

本来ならば、外国人が入れないような地域でも、集落の人々が、私たちを受け入れてくれるのは、現地に奨学生たちがいて、村人たちと信頼関係が出来ているからです。

また、40年にわたる戦闘で閉ざされてきた、反政府ゲリラの村々も、子どもたちが高校から大学にまで通えるようになるという、信じられないことが起こることで、外部世界に心を開く縁となって行くことがわかります。

MCLが読み語りをしたり医療をしたり、学用品などを届けに定期的に来るようになってから、村が明るくなったケースが多いことも事実です。

テレビで放映された『なぜここに日本人』を、YouTubeにアップして、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトにも掲載しました。「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsからも、映像サイトに入れます。

テレビで放映された『なぜここに日本人』を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。
「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、映像サイトに入れます。

ＭＣＬのスカラシップのもう一つの大きな特徴は、文化祭と総会にあります。

ＭＣＬのスカラシップでは、高校生と大学生は、２ヶ月に一回、総会に本部に集まります。総会は、奇数月の最終日曜日です。良かったら参加されてください！

５月がシンポジウムで、平和や貧困についてグループ討論をします。７月がマノボデー。先住民族の文化祭。先住民族の文化をテーマによって披露します。９月がビサヤデー。移民系クリスチャンの文化祭。１１月がスカラーズデー。この日に、卒業生たちも集まって交流します。１月が、イスラム文化祭。貴重なアジアのイスラム文化がテーマによって演じられます。３月が、卒業送別会。そのほか、柔軟に、平和の祈りを開催したりします。

こうした文化祭を行う理由は、学校教育だけでは、異文化や異なった宗教間の理解や交流が出来ないからで、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの、他と異なった大きな特徴の一つは、学生総会にあります。

こうした交流を通して、普段は相容れないと思われていた、イスラムやクリスチャン、文化が違うと軽蔑していた移民や先住民族が、敬意を持って理解し合い、共感しあえる場が作られ、それがひいては平和構築の実践へと向かっていくのです。学校教育だけで平和が作られるのであれば、すでに先進国は武器を持たず、世界はとっくに平和になっているはず。

学生総会とは別に、学期初めに保護者の集会も行います。

保護者の集会を行う理由は、一つは、しっかりと親の責任を自覚してもらうためです。集会には、親が参加しますが、親のいない子の場合も、おばさんや親せきが参加します。

山や湿原地帯の極貧の人々が、町まで来るだけのお金があるわけもないので、学生総会の時もそうですが、ミンダナオ子ども図書館でトラックなどを出して、近隣の町まで送り迎えもしています。

たとえ片親となっても、親や保護者の責任は大切です。中には、子どもを預けてしまってホッとして、その後無関心になってしまう親もいますが、それでは困るので、こうした集会で、責任感を取り戻してもらうわけです。とりわけ、下宿生活をしている子たちの場合は、ＭＣＬですべてをチェックできるわけではなく、米は支給しても、おかずの野菜などの差入れなどは親の負担にしてもらったりします。

保護者集会のもう一つの大きな意味は、イスラムの湿原地帯の人々や、山岳地域の先住民は、ほとんど自分の集落から出たことがない人が多く、ましてＭＣＬというものが、どのようなものなのかを、想像では理解しきれない部分があります。

そうした方々に、ＭＣＬに来ていただいて、他の宗教や種族の親や保護者と交流を持ってもらうことで、心が開かれて、さらに家に帰って集落の人々に、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちの、すばらしい様子を話してくださることです。

それが、平和構築にもつながっていくのです。

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

小学生・里子支援

Adzmir Maliga
小学6年
マギンダナオ族・イスラム

Analaica C. Ambis
小学6年・1999年生
マノボ族・クリスチャン

Analiza Sumandang
小学6年・2001年生
マノボ族・クリスチャン

Annabel Bagan
小学3年・2005年生
マノボ族・クリスチャン

Bernadeth E. Ilando
小学5年・2000年生
マノボ族・アライアンス

Abeguile Silva
小学5年・2003年生
イロンゴ族・カトリック

Donna Mae Cordero
小学6年・2001年生
マノボ族・クリスチャン

Elmar Fiel
小学6年・1996年生
ビサヤ族とイロンゴ族の混血
プロテスタント

Erika Navarro
小学5年・2000年生
ビサヤ族・カトリック

Felix Jr. B. Pableo
小学6年・2000年生
セブアノ族・カトリック

Jamaica M. Sakib
小学5年・2002年生
マギンダナオ族・イスラム教

Jay Ar Oribawan
小学4年
マノボ族・クリスチャン

Jennefer A. Debalid
小学6年・2001年生
イロンゴ族・クリスチャン

Jennelyn Panunggo
小学6年・1998年生
マノボ族・クリスチャン

Jomar Benigno
小学5年・1997年生
タガバワ族・アライアンス

Joteza M. Pableo
小学6年・2002年生
ビサヤ族・カトリック

上記の子たち以外にも多くの子たちが待っています。支援者の無い子の情報を知りたい方は、
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、
「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に。パスワードはmindanao。そこからメールで連絡もとれます。

高校生・スカラシップ支援

Abubakar G. Sabil
高校2年・1998年生
マギンダナオ族・イスラム

Abo Dilna
高校1年（6年制）・1998年生
マギンダナオ族・イスラム

Anamae P. Sumicad
高校2年・1999年生
ビサヤ族・カトリック

Arcela E. Tahasan
高校1年・2000年
タウスグ族・イスラム

Aslamiya A. Kunakon
高校1年・2000年生
マギンダナオ族・イスラム

Dianne L. Calibay
高校2年・2000年生
マノボ族・クリスチャン

Ebrahim Katol
高校2年・1997年生
マギンダナオ族・イスラム

Haguiar M. Duga
高校2年・1996年生
マギンダナオ族・イスラム

Hairin M. Aliman
高校2年・1999年生
マギンダナオ族・イスラム

Boyet L. Dacay
高校1年・1996年生
マノボ族・イグレシア

Jerald M. Sayad
高校2年・1997年生
マノボ族・クリスチャン

Jessibel B. Tula
高校2年・1999年生
マノボ族・アライアンス

John Paul Bughao
高校1年・2000年生
ビサヤ族・クリスチャン

John Rieth Asenero
高校2年・1999年生
バゴボ族・カトリック

Lovely Adso
高校1年（6年制）・2002年生
マノボ族とビサヤ族の混血

Mariah Mae Andas
高校1年（6年制）・2001年生
マノボ族

上記の子たち以外にも多くの子たちが待っています。支援者の無い子の情報を知りたい方は、
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、
「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に。パスワードは mindanao。そこからメールで連絡もとれます。

大学生・スカラシップ支援

Benhamin Sapaludin
大学2年・1995年
マギンダナオ族・イスラム

Japhet Merced
大学2年・1987年生
タガバワ族・クリスチャン

Lanie D. Baring
大学1年・1995年生
マノボ族・クリスチャン

Maricel B. Linog
大学2年・1996年生
マノボ族・クリスチャン

Noranbay Dimasangkay
大学1年・1993年生
マギンダナオ族・イスラム

Norhan A. Dawadi
大学2年・1995年
マギンダナオ族・イスラム

Mohamed Lumayon
大学1年・1994年
マギンダナオ族・イスラム

Rasul Makasilang
大学2年・1997年生
マギンダナオ族・イスラム

Sandra G. Makasilang
大学2年・1995年生
マギンダナオ族・イスラム

Rasmia A. Hashim
大学3年・1988年生
マギンダナオ族・イスラム

Omar P. Monib
大学2年・1995年生
マギンダナオ族・イスラム

Lilibeth A. Camino
大学3年・1994年生
ビサヤ族・カトリック

スカラシップ里子支援の方法

スカラシップ里子支援方法は、最後のページでも載せましたが、振込用紙に「スカラシップ」または「里子」と書いて、特定の子の場合は名前を書いて、一部振り込んでいただければ、現地日本人スタッフから後日紹介させていただきますが、振替用紙が現地に送られてくるまで一か月半ほどかかります。

より早く返事がほしい、または特定の「この子を支援したい」「他のこういった子を紹介してほしい」という場合は、メール　mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ）かＦａｘ 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）でお知らせください。相互にやり取りをしつつ、より迅速に希望の子どもをご紹介できます。

上記の子たち以外にも多くの子たちが待っています。支援者の無い子の情報を知りたい方は、サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に入られてください。個人情報が入っているのでパスワードが必要です。季刊誌をお送りしている方々には、パスワードをお送りしています。パスワードは mindanao です。そこからメールで連絡もとれます。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には年五回、４、６、８、１０、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』と、時に特別号で絵本やＤＶＤをお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。年間１４０名を超える子どもたちの医療費、支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費（現在 200 名弱）、子どもたちの食費や生活費（ほぼ２５０名）。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。
季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。
不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準としています。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障し、大学まで通えます。奨学生は現在６２０名。本部に住んでいる子は、ほぼ 120 名。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円　（内容は高校生と同じですが、下宿代を加算）
２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円
振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年５回の季刊誌と特別号に同封して、本人からの手紙、６月に成績表、８月に写真、１２月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は､随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌と特別号に同封して、８月に写真、１２月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内。
プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

その他の支援

１、保育所・下宿小屋建設支援・・・４０万円（建設費と建設後の修理代）
振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年五回季刊誌と同時に毎年１０月には、現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。
２，植林環境支援・・・６万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代を加えました）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
３、古着支援等・・・ウエッブサイトの支援方法をご覧ください。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、
メール mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ）
Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）メール：mcltomo@yahoo.co.jp
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines